

令和元年度「地域活性化推進研究プロジェクト」成果報告書

所属部局名	教育学部	申請者氏名	竹澤大史
研究プロジェクト名	発達障害のある子どもの地域の小中高等学校及び幼稚園・保育所への二次障害予防のための教師へのコンサルテーションに関する研究		
当初計画に対する目標達成率	80	%	研究プロジェクトの終了時期 令和2年3月
予算配分総額	500,000	円	経費使用総額 円(担当課で記入)

【研究プロジェクト事業の成果】

本研究では、地域の幼稚園・保育所、小・中・高等学校等における発達障害のある子どもへの指導・支援に関して、コンサルテーションを通して地域の幼稚園・保育所・小中高等学校指導の助言や問題解決を行うことのできる教員の養成を目指し、地域に開かれたフォーラム形式の授業の内容及び方法について検討し、特別支援学校のセンター的機能の充実、ひいてはインクルーシブ教育の充実を図ることをプロジェクトの目的とした。

教育学部特別支援教育教室では、文部科学省の方針、及び本学の中期目標・中期計画に則り、教職大学院特別支援教育コース及び特別支援教育アドバンスプログラムを本年度4月から開設した。インクルーシブ教育科目群の検証や現職学校教員の実習プログラムの検証を行い、本学教育学部・教職大学院におけるインクルーシブ教育を推進する特別支援教育モデルカリキュラムを開発した。その中で、研究・実践報告を中心としたフォーラム形式の授業を行った。この授業は、大学院生及びアドバンスプログラムの学生の現職教育、アクティブ・ラーニングの一環として位置付けており、今年度より教職大学院における「特別支援教育とコンサルテーション」として実施した。現職教員が他職種・他機関の目的・機能を理解することによって、学校での児童生徒に対する教育支援の改善を目指すとともに、特別支援教育の専門性から地域の学校や学級の教員にコンサルテーションを行う実践力を身につけることを目標とし、大学教員による講義に加え、専門領域のゲストスピーカーによる講演を実施した。また大学院生・アドバンスプログラムの学生による研究報告に対して、教員によるフィードバックを行った。

第1回

日時：5月22日 18:00-20:00

テーマ：社会福祉援助の視点とコンサルテーション：障害者支援のための社会資源の理解も含めて

講師：和歌山大学教育学部 古井克憲

人を社会的な環境の中で生きている存在として捉える人間観を踏まえたあと、社会福祉援助におけるエコロジカル視点について講義をしました。さらに、社会資源を図式化する方法として、エコマップ、ジェノグラム、ファミリーマップについて紹介しました。講義を行った後は、例題をもとに参加者の皆さんでグループディスカッションを行い、障害者支援のための社会資源の把握も含めた子どもや家庭の生活支援について理解を深め、コンサルテーションを行うことの重要性を確認することができました。このフォーラムには、お忙しい

中 19 名の方がご出席下さり、大変有意義なフォーラムになりました。

第 2 回

日時：6 月 23 日 18:00-20:00

テーマ：発達障害のある人・家族・支援者への相談活動について

講師：和歌山大学 教育学部 竹澤 大史、和歌山県発達障害者支援センターポラリス 辻 幸代氏

今回は、和歌山県発達障害者支援センターポラリスセンター長辻幸代氏をお迎えして、和歌山大学教育学部の竹澤が講演いたしました。お忙しい中 27 名の方がご出席くださり、大変有意義なフォーラムになりました。発達障害者への支援のための体制整備として、発達障害者支援センターを設置し、別途配置している、発達障害者地域マネージャーと緊密に連携して、困難なケースの対応や関係機関との連携を行っている。和歌山県では、民間に委託し「ポラリス」がその機能を担っている。また、発達障害児者及び家族等支援事業として、ペアレントメンターの養成事業などを行っている。ペアレントメンターの役割は、同じ親として仲間の子どもの障害理解や障害授受の支援をすることや、地域のリソースに関する情報提供などを行っている。ポラリスでは、相談支援事業、就労支援事業、普及啓発事業などの業務を行っている。発達障害のある方への相談支援の際には、「視覚的に情報を提示する」「具体的で肯定的な表現を心がける」「見通しを持たせる」「感覚過敏への配慮」を行うことで、支援者にわかりやすく穏やかな対応になるように心掛けている。発達障害のある人には、途切れない支援を行うことが大切であり、そのためには、できるだけ在学中に、本人や家族が受け入れられる機関に繋げることが重要である。また、連携する際には、あらかじめ紹介した目的を伝え、できれば相談に同行することが望ましい。

第 3 回

日時：7 月 31 日 18:00-20:00

テーマ：障害のある人のライフステージに応じた発達支援の現状と課題

【幼児期】発達障害のある子どもの早期発見・早期支援における連携について

【児童期】児童期における発達支援の課題

【成人期】知的障害者の成年後見人制度の利用と意思決定支援

講師：和歌山大学教育学部 竹澤大史、江田裕介、古井克憲

幼児期・児童期・成人期の発達支援の現状と課題について講演いたしました。この講演は、4 会場を中継し開催する予定でしたが、テレビ会議システムの不具合により和歌山大会場のみの開催になりました。お忙しい中 37 名の方がご出席くださり、大変有意義なフォーラムになりました。発達障害者支援に関する行政評価・監視「結果に基づく勧告」（総務省、2017）によると、乳幼児健診において発達障害が見逃されている恐れがあり、障害の早期発見の課題は市町村によってばらつきがある。発見後の市町村の対応は保健師による経過観察が多く、その情報は、保護者の同意が得られ保育所・幼稚園から依頼があった場合に引き継がれる割合が高い。また、保育園や学校では、専門機関や支援センターへの紹介が行われている。その際、情報共有や引き継ぎの多くは支援・指導計画などの書類で行われているが、口頭のみの場合もあり、正確性の問題や記録が

残らないなどの課題がある。和歌山県では、「つなぎ愛シート」の作成を通して、児童生徒の実態把握や保護者との共通理解、移行時の引継ぎの課題の解決を目指している。また、紀の川市では、母子支援から子育て支援へと切れ目のない支援を行う連携システムがある。早期支援コーディネーターを配置して、保健師・発達相談員と共に保護者の相談を行っており、学校見学・体験の際には同席して保護者と学校の調整も行っている。

児童期は、学習能力の発達や身体の組織的な成長など、心身両面の発達期である。子どもたちは、学校を中心とした生活の中で、将来にわたって必要な知識や技能を学び、先生や友達との関係を維持した社会集団へ適応できることが求められる。このような子どもを支援するにおいて大切なことは、子どもの発達の評価を行い「自力でできること」と「他人の力を借りることで可能になること」を見極め支援することである。

発達支援の課題として、①医療・保健②福祉③就労④教育が挙げられる。①は、投薬など障害の病理への対応、保健指導など生理的機能の安定などである。②は、放課後デイサービスなど家族の負担軽減と余暇の充実や家庭・地域生活の安定、保護者間の連携などである。③は、卒業後の自己実現への課題である、就労の形態や施設への入所などの選択。④は、教科学習や自立活動、心豊かに生きる力を育む情操教育である。

関係機関との連携では、児童期の発達課題は複合的であり、管轄の違いや個人情報の保護や守秘義務など様々な課題が連携を困難にしている。その中で、連携のキーパーソンとなるのが保護者である。保護者は、各機関から提供された情報を他機関へ報告することに問題はない。保護者が情報活用能力を高め、関係機関と繋ぐ存在になることが連携を充実させることになる。

「成年後見制度」とは、認知症や知的障害、精神障害等により判断能力が不十分な者に対し、成年後見人等が本人に代わって福祉サービスの利用契約や財産管理を行い支援する制度である。知的障害者の成年後見制度の課題は、本人の生活文脈に応じて後見類型の判定がなされているか、親の考えが過度に優先されていないか、高齢の親が継続して後見を行えるかなどが挙げられる。このような課題がある中で、成年後見人等は、本人の意思決定支援において、本人の決定を尊重しつつも、本人の置かれた状況を的確に判断すること、そして、本人の視点で最善の利益を考えた上、本人と後見人等が合意形成をしていくことが大切である。また、本人の意思決定能力、社会生活能力を高めることも重要である。それには、子どもの頃から意思決定の場面を積み重ねることが大切であり、その際の教育や支援の方法が、意思決定能力の向上に繋がる。

第4回

日時：10月30日 18:00-20:00

テーマ：ICTを活用した特別支援教育の実践

「ICTを使用した教育実践交流会」「iPadとドロッフトークの活用」「視線検出装置の利用」「シンボルを利用したコミュニケーションの支援」

講師：和歌山大学教育学部 江田裕介、和歌山県立紀伊コスモス支援学校 黒江純子、和歌山市立河北中学校 西本陽子 和歌山県立紀伊コスモス支援学校 海野圭子、和歌山県立紀北支援学校 東昌美、和歌山県立さくら支援学校 正木芳子氏

今回は、和歌山大学教育学部の江田裕介が「ICTを活用した特別支援教育の実践」をテーマに、和歌山大学会場より講演いたしました。さらに、地域の特別支援学校や特別支援学級で『ICTを使用した教育実践交流

会』の研究活動に取り組んでいる先生方をお招きして、実践報告をしていただきました。お忙しい中 36 名の方がご出席くださり、大変有意義なフォーラムになりました。

支援を必要とする子供たちの課題を少しでも解決したいという思いから、様々な研修会に参加し、このフォーラムにも参加していた。そんな中、iPad のアプリを使用して、子ども達が楽しみながら意欲的に学習を行っているとの報告を聞き、アプリについて学びたいと思った。そんな時「気軽に実践についての交流ができればいいね」と江田先生のアドバイスをいただき「iPad 実践交流会」をスタートした。この交流会は、気軽に実践や機器・アプリの情報交換ができる場になるように取り組んでいる。そして、ここで学んだことを実践することで、子供たちが豊かに学び、少しでもコミュニケーションが広がり社会と繋がれるようになればと思っている。

クラスには、教室で言葉を発することが難しい生徒や、伝えたい気持ちはあるが発音が不明瞭で文字を書くことが苦手な生徒がいる。生徒が安心して朝の会や終わりの会ができて、分かりやすいスケジュールを作る方法がないかと思った。そこで、「ドロップトーク」というアプリを活用することにした。生徒自身が写真の撮影、呼名の録音、スケジュールなどのキャンパス作りを行った。すると、生徒は、複数のキャンパスを使用して司会をしたり、毎日のスケジュールを作成するようになった。生徒の中には、iPad で文章を作成して駅で回数券を購入するなど、社会のなかでコミュニケーションをとる手段として活用することもできた。このような取り組みの結果、生徒たちは自信を持つことができ、相手に思いを伝えたいという気持ちも高まってきた。

iPad を使用した支援をするには、活用のねらいをはっきりさせ、個々の生徒の実態を把握して、その実態にあった手立てを行うことが大切である。また、iPad を使用することにより、苦手な読み書きをしなくなるのではないかという意見もあるが、生徒が苦手な部分を補うことで、表現することや学ぶ喜びを感じ「書きたい」という気持ちに繋がると考えている。

訪問授業を行っている生徒は、「元気」を示した絵が、自身が元気であるということとだと理解しているか、自身が絵と向き合っているかを確認するために、視線入力で活用するアプリトレーニングを行った。まず、仰臥位で、視線入力装置を活用した、風船割りをを行った。初めは、画面をみるのが少なかったが、固定具を変更し、微調整すると視線履歴が良くなってきた。今度は、座位でタックスペイントを使用してみると、線や背景の色を変えたり、形の選択をして多くの四角を描いたりとできる事が多くなっていった。その後、ドロップトークを使用して、音楽鑑賞をしたり、学習の振り返りで感想を伝えられるようになった。視線入力装置を活用するには、姿勢と固定の調整が重要で、座位姿勢にすると一気にできることが増える。ドロップトークで、音楽鑑賞や感想も視線で選択できるようになり、スイッチより簡単だと思い始めているのかと思われる。卒業後の生活に活かすことができればと思っている。

関西国際空港や JR では、トイレや両替所など基本的に必要とされているところに、誰が見てもわかるように PIC というシンボルを使用して案内している。このように言葉が通じにくい場合や、様々な言語で網羅するのが難しいところにシンボルを使用して表示することは有効である。近年、日本の特別支援学校では、「Drops」というシンボルがよく使われている。これは、学校教育を前提とした語彙（絵柄）が豊富であり JIS にも準拠している。自閉スペクトラム症や知的障害の児童の学習とコミュニケーションをグラフィックシンボルとタブレット PC でおこなう視覚支援がある。その中で、アプリ Drops Talk は、シンボルを選択して

自動的に文章を作成したり、音声で意思を伝えたりすることができる。

第5回

日時：11月27日 18:00-20:00

テーマ：音楽療法の視点を取り入れた自立活動の実際－地域の文化財を活用した音楽づくり－

講師：和歌山大学教育学部 山崎由可里、上野智子、菅道子

今回は、和歌山大学教育学部音楽教育教室の上野智子氏、菅道子氏をお迎えして、和歌山大学教育学部の山崎が講演いたしました。お忙しい中18名の方がご出席くださり、大変有意義なフォーラムになりました。ある小学校で、音楽教育教室の上野先生、菅先生と共に、音楽を通した自立活動の授業を行っていた。その小学校の担任教諭（現在：中学校教諭）から、その後のお話を伺った。小学校で関わった生徒が中学校へ進学してきたが、学校生活に馴染めず悩みを抱えている様子だった。小学校時代に好きだった音楽を通して、生き生きとした学校生活が送れるように「心の耕し」ができないか考えた。「心の耕し」とは、①緊張をほぐし心理的安定が保てるようになること②自己を受容し伸び伸びと自己表現できるようになること③他者理解を深め関係性を築いていくこと。小・中学校と継続して実践することが重要だと思い、自立活動「音楽の時間」で小学6年生と中学生が共に活動した。音楽療法的な視点を取り入れ、自由に楽器を選択すること、表現のタイミングや表現しないことも尊重し、児童・生徒の「いま・ここ」の表現を大切にしたい。生徒たちは自由に自己表現をして、他者とコミュニケーションとりながら活動することができた。さらに、地域の民話で合奏したり、しごと歌で表現するなど、文化を教材にした音楽づくりを行い、地域の方も来校する中学校の文化祭で発表した。生徒は、取り組みを通して地域の文化を深く学ぶことができ、先生方や地域の人々と文化を共有し交流することができた。このような地域教材を使用した取り組みは、交流を深めたり広げたりする重要なツールになると考えられる。

第6回

日時：12月18日 18:00-20:00

テーマ：教職大学院生による発表

「生徒の主体性を育む作業学習のあり方について」

発表者：和歌山大学教育学部教職大学院 栗本吉晃

「重度肢体不自由児の表現活動の指導について」

発表者：和歌山大教育学部教職大学院 上野山優

「思春期以降の軽度の知的障害や発達障害のある生徒の不登校等の二次障害に対応できるカリキュラム開発」

発表者：和歌山大学 教育学部教職大学院 井関迪恵

第7回

日時：令和2年1月22日

テーマ：アドバンスドプログラム生による発表

「通級指導教室が生徒の自己受容に果たす役割-中学校の現場から見えてきたこと-」

発表者：和歌山大学教育学部アドバンスプログラム 山下美亜

「肢体不自由児のコミュニケーションの支援に関する実践研究ー視線検出装置と AAC の利用ー」

発表者：和歌山大学教育学部アドバンスプログラム 藺村麻矢

「小学校特別支援学級における社会性の発達・学習支援に焦点をあてた自立活動の指導について」

発表者：和歌山大学教育学部アドバンスプログラム 福田規江

【当初計画段階との対比】

当初の計画では、テレビ会議システムを活用して、橋本・田辺・新宮地域へ授業を配信する予定であったが、システムの不具合のため、実施することができなかった。そのため、通信設備やデータ収集・分析のための設備を導入する必要がある、配分された人件費及び運営費の一部を備品費に充てて執行した。

【今後の展望等】

○ 研究プロジェクトの発展性（根拠に基づき記入）

1. 教職大学院の「特別支援教育とコンサルテーション」として、テレビ会議システムを活用し、地域に開かれたフォーラムを開催する。

2. 教職大学院生・アドバンスプログラム学生に加え、和歌山県立きのかわ支援学校（橋本市、かつらぎ町等周辺地区）、和歌山県立たちばな支援学校（有田・湯浅地区）、和歌山県立紀伊コスモス支援学校（和歌山市、岩出市）の地域支援部・相談担当教員、その他を対象に、フォーラムを通じた情報提供を行う。

3. 特別支援学校教員による地域の園・学校へのコンサルテーションの実践に対して、特別支援教育教室教員がスーパーバイズを行い、アセスメントや支援方法に関する助言を行う。

○ 外部資金等への申請実績及び今後の予定

民間の研究助成、科学研究費補助金への申請を行う予定である。

○ 学内における成果の活用（予定も含む）

今後もフォーラムを継続し、学部生、アドバンスプログラム生、教職大学院生へ学習機会を提供する。

○ 学外における成果の活用（予定も含む）

フォーラムの実施を通して、県内の特別支援学校の地域支援部・相談担当教員へ情報提供を行う。また、地域の学校へのコンサルテーションを行う。

○ その他特筆すべき事項

【成果の外部公表の方法及び時期】

- ・竹澤大史. (2020). 発達障害のある子どもを担当する保育者を対象とした研修プログラムの効果測定の試み. 和歌山大学教職大学院紀要学校教育実践研究, No.4., 29-34. 発行日：2020年3月25日
- ・岩崎朝蔵・竹澤大史. (2020). 他職種と連携したコンサルテーションを活用した小学校の校内研修の在り方. 和歌山大学教職大学院紀要学校教育実践研究, No.4., 85-95. 発行日： 2020年3月25日

※研究プロジェクトの内容・成果等がわかるポンチ絵（写真・挿絵など）や関係資料を添付してください。

	計			60000				214104
合 計				500000				500000